

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 39 号	2004年10月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠
---------------------------	-------------------	---

1. 活動報告（事務局 記）

9月25日（土）長崎伝習所 生きもの再生塾の21名の方がビオトープの見学に来られました。今井会長の説明の後、田村、北村、西原会員で遊ロードとビオトープを案内しました。長崎市内の休耕田を利用したビオトープ作りを計画されています。

10月3日（日）本日の作業は、16日の稲刈りにそなえて、田んぼ周りを中心に草刈を行いました。

10月10日（日）リサイクルプラザでリサイクルフエアがあり、地球温暖化対策ネットワークの会員として田村会員、原田マ会員が、ソーラックッキングと廃油ローソクの製作に参画しました。

10月16日（土）本日の稲刈りには多数の会員の方が参加されました大変お疲れ様でした。会員26名、里山観察隊隊員13名及び保護者会員8名、二俣瀬子ども会24名及び保護者10名、二俣瀬小学校校長、教頭総勢83名で稲刈りはあっとゆうまに済みました。

10月16日（土）今日の里山自然観察隊はドングリマップをつくらうです。隊員9名と保護者7名と会員5名でドングリを探しました。遊ロードではスダジイ・コナラ、須賀河内川沿いではコナラ・アラカシ・スダジイ、ビオトープ南の森ではスダジイ・コナラ・アラカシ・クヌギを見つけました。

2. 今後の予定（事務局 記）

見学者

10月31日（日） 小野田ハイキングクラブ 昭和山、男岳、ビオトープ見学

11月27日（土） 宇部地区健康福祉センター主催 厚東川、有帆川。厚狭川環境学習会

行事

10月29日（金）稲こぎ及び乾燥

10月31日（日）夕刻 糲摺り 善和 未永さん方にて

11月 7日（日）作業 竹炭製作準備、湿地帯のスゲ間引き

11月13日（土）作業と里山自然観察隊（里山の生活）

11月15日（月）やまぐち環境パートナーシップ広域会議 今井会長、藤田副会長出席

11月20日～21日 二俣瀬ふるさとまつり 皆様ふるっておいでませ！

3. ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝

マアザミとミゾソバ

10月に入ってビオトープも花の姿は少なくなってきました。湿地を彩る最後の花、マアザミとミゾソバを今回はご紹介します。

マアザミは、別名キセルアザミともいい、湿地に生えるアザミです。マアザミとは若い葉を食用にすることから真のアザミという意味で、別名のキセルアザミは、頭花がつぼみのうちは下を向いているので、そのかたちを煙草を吸うキセルに見立てたものです。場所によっては、ずっと下を向いているマアザミもあるといいますが、ビオトープ周辺のマアザミは最初から上を向いているようです。他のアザミのように茎にはほとんど葉をつけず、葉はロゼット状の根出葉で、長い花径を伸ばして花を付けるのが特徴です。湿地に生えるアザミとしては大型で美しい種類だと思います。マアザミは、ヒョウモンモドキという絶滅の危機に瀕しているチョウの食草です。このチョウは、福島県から山口県までの広い範囲

に生息していましたが、近年生息が確認されているのは広島県のみで、山口県ではいなくなりましたようです。ヒョウモンモドキは、湧水が涵養している比較的小規模の湿地と、草刈りされた畦がセットになっている場所を生息地としています。すなわち、幼虫の餌となるマアザミが育つ湿地と、成虫の吸密できるノアザミやヒメジョオンなどが咲く畦畔が近接した場所です。こうした環境は、かつて山間部の水田のまわりにはいたるところあったでしょうが、現在は人の手が入らなくなって藪化してしまい、このチョウの生きていける環境がなくなったことが絶滅に瀕するようになった最大の原因であると思われます。ビオトープは絶好の環境のように思われますが、もはやすでに時遅し、といったところです。広島県には、「ヒョウモンモドキ保護の会」というのがあって、このチョウの保護活動を行なっているようです。

ミゾソバは、日当たりの良い湿地であればいたるところに生える一年草で、溝のような湿った場所に生える蕎麦というところからこの名前が付けました。茎の頂部に固まって付く直径5mmほどの花は、下部が白く、先のほうが少し紅色を帯びています。果実は卵形で三つの稜（かどばった部分）があり、ソバの果実に良く似ています。ありふれた草ですが、白っぽいから濃いピンクまで、色とりどりの花が群れ咲くようすは、金平糖を撒き散らしたようにきれいです。今年は9月の台風と長雨で、ビオトープのソバはほとんど全滅してしまいましたが、ミゾソバはその名の通り、雨や台風などもともせず、元気に咲いています。



マアザミ（キク科）



ミゾソバ（タデ科）

4. ビオトープ関連（会員の声）

「私の里山考」

（北村 健治 記）

本来里山は人が住むために、生活を営むために、必然的に人工的に維持された自然であり、地域であります。我が「里山ビオトープ二俣瀬」も人工的に造成されたものであり、私は「里山」であれ「ビオトープ」であれ、一旦人工的に造成されたものは、以後も人の手を加えて保護していかなければ決して維持されないものと考えます。従って、日常の保守活動が大切なものであり、作っただけで後は知らないでは、間もなく自然淘汰する運命にあると思います。「里山ビオトープ二俣瀬」の田んぼを見るに付け、会員は皆、無農薬・有機肥料と言うが実態は、地元の人の管理は並大抵ではないものであり、この欄では言い表せません。ここに、農耕に携わった先祖の人達の労苦を身で感ずる良い機会を「里山ビオトープ二俣瀬」は与えて呉れたものであると思います。「里山ビオトープ二俣瀬」の発足造成時には、

環境保全だの、自然保護などと熱意をもって多くの人達が参加されたが、今は出席者も次第に少なくなり、当初の熱意が失われつつある証であると思います。環境保全だの、自然保護などは持続的な活動こそが保守出来る手段であり、実践的な活動なくして何をか言わんやである。今も発足当時の理念を、地元の人達が真剣に遂行されている。地に付いた活動を思うとき一般会員の誠意の無さに些かの不安を覚えます。美しい日本古来の里山の自然を少しでも多く後世に残す責務は、今、生きている私達にあると思います。だからこそ私は今も、今後も「里山ビオトープ二俣瀬」の定例の活動だけでも参加できる「幸せ」を享受しつつ拙い文を終わります。

追記：私の希薄な識見の中での「里山ビオトープ二俣瀬」の発足造成時の植生を一応把握しているいるが一切公表する気はありません。一部移植したのものについては、この会報 2号から10号までに投稿しましたが、一般的にあまり興味のないものであると思い投稿を止めました。

獣道、通過した形跡なし 果たして必要か

今回は 納屋 早与子 会員にリレーします。宜しく

「エゴノキとウメモドキの植栽は？」 (寺森 正行 記)

今日は！七月に入会しました寺森と申します。よろしく申し上げます。

今年、成人式を迎えた(但し3回目=還暦)のを機に、新しいことに挑戦する決心をし、赤いチョッキを着た時に宣言した。「苦手な植物に積極的に接し、将来は得意分野とする夢を・・・」

第一歩として山野草・雑草を観察し、名を憶え、識別能力を培うことにした。手段として「里山ビオトープ二俣瀬」に入会し、湿地・水田に生息する植物を、先輩方にご指導いただく胸算用だった。現実には作業に追われ、ご指導を賜る時間も先輩も少なく、自力で観察し、図鑑をめくりたおして学習している。ビオトープが存在するので、努力次第でどうにかなりそうな状況である。植物にもアンテナを向けている影響で、自然界の広さ深さをより感じている今日、この頃である。

夏の異常な猛暑と三度の台風直撃で植物にも異変が起きている。狂い咲きの桜・木蓮・コブシ・ヒメキキョウ等に加え、我が家では主にふさわしく(?)、春に咲く紅色の木瓜(ボケ)がちらほら咲き、前途を暗示しているのかも?(トホホ・・・)

とまあ、長い前置きは終えて、短い本題に入ることにする。

私は野鳥観察を20年経験しているので、生態系について関心もあり、ある程度理解しているつもりである。「ビオトープ二俣瀬」には、多種多様の植物・昆虫・魚などが存在するが、より高次のニッチ(地位)である野鳥は多くないようだ。現状で生態系が保たれているのかも知れないが、その点は不満である。私は筋金入りのバーダー(野鳥観察者)を自認している。エコひいきと言われるかも知れないが、野鳥が少ないのは寂しいことだ。そこで、野鳥を誘うエゴノキとウメモドキの植栽を提案したい。エゴノキ(須賀河内川上流に存在)は秋に白い実をつけ、ヤマガラの大好物だ。ウメモドキ(二俣瀬集落に存在)は冬に紅色の実をたわわにつけ、ジョウビタキなどが採餌にくる。春にはカワセミ、夏にはサギ類が見られるようになると、よりエコアップしたビオトープになるのでは・・・。それらの可能性を具備した環境と考えている。新しい植栽による効果も問題も考えられるので、先輩諸氏にご検討いただきたい。

尚、エゴノキとウメモドキの若木は無償で手に入ることを付記する。

5. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

今回はありません。

6、会よりの連絡事項

- (1) 活動道具の寄贈 寺森会員〔7月入会〕より一輪車 2台いただきました。
- (2) 稲こぎ、籾摺りのお手伝いや見学者の案内を依頼しますので参加できる方は事務局までお知らせください
- (3) 北村会員が言われている事に共鳴します。会員の中には他の環境団体やボランティアの会にも入っておられる方が多く、又自分の都合等々で活動に参画できないことも多々あると思いますが、自分で活動に対する意見を述べ、又は同調された活動には他の行事はさておき、当「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」の活動に優先して参加願いたいと思います。
又今年一度も活動に参加されなかった方、もう一度ビオトープを作ったときを思い出して今年の残りの活動に参加していただくようお願いしたい。

7. 編集後記

3日の活動日に孫の運動会に参加してビオトープを途中はなれたため、罪滅ぼしと思い台風で倒れた昭和山遊ロードの木を切り除いた後、ビオトープに来てびっくりしました。湿地帯の水がほとんどなく、1箇所は直径1.5mで、もう片方は排水溝の方の直径4mの水溜りしか残っていませんでした。この中はめだか、フナそのほかドジョウが生きも絶え絶えアップアップしており、急遽水門から溝いっぱいの水を取り入れ、直ぐには水が流れ込まないため、網とバケツを取りに帰って水溜りのめだか等をすくいあげ池に戻しました。更にため池から水戸を通じて手バケツで相当な時間汲みおろしましたが、まったく水溜りまで水が流れこまず、自然に池にたまって湿地帯に流れ込むのを待ちました。夕方確認に行きましたが、池のレベルがようやく水戸の高さになって、あくる朝元の水面に戻りました。

9月末の台風とその後の大雨のとき、井手の板を外されてその後その板を外したままであったために起こった現象だろうと思います。水溜りのとき、恐らくゴイサギや狐のえさとなってかなりの量を食べられたものと思い残念でなりません。

(原田 満洲夫 記)